

都市と農村の共生に向けた論点の整理

- 都市農村交流との相違、人と自然の共生との類比から -

Considerations for Co-Prosperity of both Urban People and Rural
-Differences from Interchange between City and Village, Symbiosys on both People and Nature-

松尾芳雄¹ Matsuo Yoshio¹

概要 農村との交流を契機として、都市住民の農村定住を農村は望んでいる。また、農村空間管理の担い手としても期待される。農村の良さに触れる機会としての交流と地域に定住し新規住民となる定住では実行面で大きな隔たりがある¹⁾。交流と定住の間の中間的な関係として、都市と農村の共生関係が位置づけられると考えられる。そこで、都市と農村の共生に向けた計画・整備に資するため、都市農村交流との相違、人と自然の共生との類比の視点から、都市と農村の共生に関する論点の整理を試みた。

都市農村交流との相違 都市農村交流の目的は多様だが、交流を成立させる前提条件的な事項、交流主体、交流内容(要素・機会を含め)、交流の場(農村空間)の点から、交流と共生の相違検討の視点が整理できると思われる。加えて、一過的な交流態様もあるが、交流(活動)の持続性も検討の視点となる。

交流主体 都市側と農村側のいずれの主体においても、交流では1(少数)対多数(不特定)の場合が多いことに対し、共生では、特定(個人～集団・組織)対特定(個人～集団・組織)となることが予想される。都市側の主体の「顔」も見えなくてはならない。

交流内容 さらに、「ヒト」・「モノ」・「コト」で整理可能²⁾と思われる。「ヒト」の面では、「ヒト」の持つ魅力(技能・人柄・人生観・経験)に加え、個人の受容可能性が前提となる。また、農村社会(村柄)や農村空間(水や緑の豊かな広がり)の有する魅力に加え、地域社会の受容性が同様に求められる。「モノ」は農林産物とその加工品が主となるが、その魅力となる良食味や生鮮性に加え、顔の見える生産物(安全性や信頼性)といった付加価値がある。農村空間の呈する良好な農村景観も「モノ」に含めても良いかも知れない。「コト」は、祭事・伝承行事、開かれた催事が相当する。ここでの留意点は、これらの要素、「ヒト」・「モノ」・「コト」は、参加主体

の満足感や達成感を介してさらなる要素や機会に繋がる可能性(発展性・展開性)を有するが、同時に不満足による逆の展開も起こり得る。共生では、この逆の展開が発生しないよう点検するシステムが必要とされる。

交流の場 の要素を対象としたあるいは要素に係る主体の種々の活動の場(農村空間)を指す。農村空間の「場」としての条件は、土地利用秩序や空間管理状況といった空間的な健全さ(魅力)を前提に、諸活動を行う場としての条件(と整備)や、農村景観等における存在としての場では時間軸に係る作物生育時期、季節、時機等の点も付加される。なお、対等性の観点からは都市空間も対象になり得ると思われる。共生では、場合により対象となる都市空間とそこにおける都市的要素も明らかにされる必要性が生じるかも知れない(相互留学等の場合)。

活動の持続性 活動頻度の面から、交流が散発・偶発的な場合もある(多い)ことに対し、共生では定期性、常態化(日常化)が想定されることから、共生(活動)では持続性を確保するための支援(制度面や技術面)や物的条件整備が、交流以上に望まれると思われる。

共生と交流の主な相違は、その対象となる主体と要素や、要素を介した主体間関係への特定・固定化への必要性が異なること、活動面では「共死」(共生の対局としての共倒れ)のリスクを考慮した上で、共生環境のソフト面(アドバイス等の技術情報面や制度面における支援)とハード面(物的条件改善)の整備がより必要とされるだろうこと、さらには、都市と農村の両サイドの主体における「共死」を意識した共生志向と相利共生を動機として相互配慮面での受容性が個人や地域社会に求められることであると判断される。

交流または共生の目的に関し、それらの効果の視点から検討する。交流により、他者による刺激(異なる価値観との接触)は、関連活動の位置づけや意義を相対化・評価する機会となるなど、

¹ 愛媛大学農学部 Fac.of Agr., Ehime Univ.

主体者である個人や集団・組織の啓発やひいては地域の活性化への期待も大きいですが、主体の受容性や熟度によりその効果は大きく異なる(効果の保証面が希薄・脆弱)と思われる。共生においては、主体における啓発や活性化の効果に加え、共生要素や場の洗練・改善や発掘への志向とその実践行動への展開が期待される。そのような改善や発掘が実践される時、農村側でのPDCAサイクル(Plan/計画 - Do/実行 - Check/評価 - Act/改善)⁴⁾の継続的改善の体制が形成され、共生活動の持続性(と共生環境の改善等)が計られることになる。このとき、都市側は主にCheck(場合によりPDCAすべて)の局面で関与し、農村側での洗練された要素や改善・発掘された場(都市側にとって魅力を有することが前提)を共有・享受するという共生関係が持続的に成立すると考えられる。これには、農村側での個人・集団レベルでの目的志向と柔軟な受容性が前提となる。

人と自然の共生との類比からここでは、人と自然の共生に関する参考資料³⁾を前提にし、その類比から仮説的な意図を見を整理する。同資料によると、人と自然の共生関係はシステム論的に図-1のように示される。以降の用語等は、参考資料を参照することにする。人と自然の共生関係がない場合は、自然システムと人工システムは「切断」され、両システムで同じ要素の共有(「交絡」という；後述の「自然の取込み」a、「自然の人工化」bの部分)が相当する)はない。図-1において、両システムで要素を共有する交絡(a, b)を利用し、システム間の対立を緩める考え方が緩衝戦略とされる。自然の取込みaは、人工システムの側に自然を取り込む形で緩衝帯とする場合で、遠景の山並みを借景とする庭園や日本家屋の軒下の濡縁などが例示される。自然の人工化bは、家畜化を意味するドメスティケーションともいわれるが、自然システムの一部を人工システムの側に取り込み、人工化する形で緩衝帯をつくり、自然立地条件を活かしたワサビ田が例示される。緩衝戦略とは別に、外部システムにより対立を意図的に制御する戦略がある。超越システムとされ、古来、神あるいはそれに類するものがその役割を担ってきた。知識システムによる下支えシステムとして、自然を理解し自然に学ぶエコツーリズムや、里に出没しゴミ箱をあさる「ゴミ熊」をお仕置きし自然に帰すように自然側にも

人工システムを学ばせることを示している。

都市農村共生ではどうなるのかを類比的に考察すると、仮説的だが図-2のようになる。農村システムにおける都市化や都市システムにおける農村化といった共生戦略が想定される。また、超越システムには、地球環境の保全や持続的な食料生産のシステム、共生のための規制・誘導を行う制度が相当し、下支えシステムには、相互理解のための情報化(情報システム)や関連補助施策、NPOやボランティア等の支援体制が相当すると考えられる。共生はお互いの無いものの相互補間(相利共生)であるが、地域における共生へのニーズ(無いもの)の明確化とシーズ(農村資源)の発掘が前提となり、価値観の相違や空間的な制約を考慮した上での、共生への合意形成と活動の持続化に係る地域社会の受容条件となる。超システムや下支えシステムに関する公的支援が必要となるが、交絡(共生戦略)に関する補助的支援(促進、場合により抑止)も適宜、必要となる。

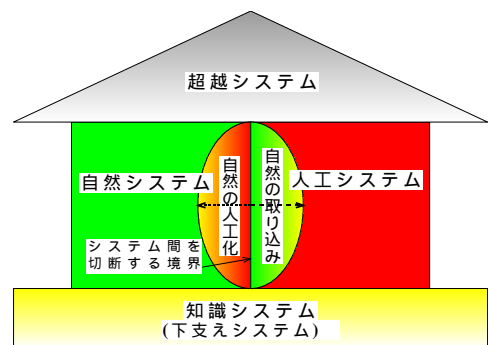


図-1 人と自然の共生システム

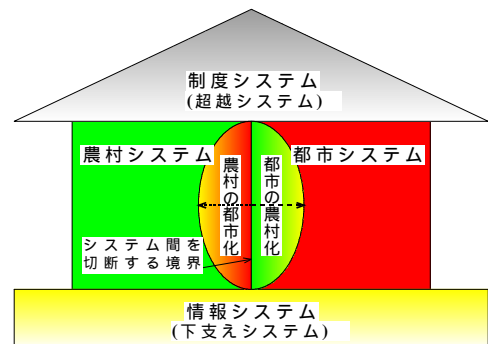


図-2 農村と都市の共生システム

参考資料

- 1) 松尾芳雄, 武田麻里, 豊輝久: アンケート調査による都市農村交流活動の特性と活動団体への支援について, 農業土木学会大会講要, 494-495(2005)
- 2) 松尾芳雄: 農村地域の「ヒト」、「モノ」、「コト」の再生産性と地域管理、農村計画31(1), p.1(2005)
- 3) 中嶋間多: 山と里を活かす - 自然と人の共存戦略 -, 信濃毎日新聞社, 178-190(2003)
- 4) JIS: 環境マネジメントシステム - 仕様及び利用の手引き, 日本規格協会, 1-2, 1996
- 5) 松尾芳雄: 都市と農村の共生に関するメモ, 農業土木総合研究所, 平成15年度農村振興整備状況調査(都市と農村の共生・対流に関する検討調査)報告書, 32-36(2004)